

ヨハネによる福音書14章15-31節 「御霊の約束」

1A 戒めを守る愛 15-24

1B 真理の御霊 15-21

2B 共に住まわれる方 22-24

2A 思い起こさせる方 25-31

本文

ヨハネによる福音書 14 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは前回で、ヨハネ 14 章前半までできました。今朝は、後半部分 15 節から見ていきたいと思います。私たちは、前回からイエス様が、弟子たちから離れて、父のもとに戻ることを語られて、置き去りにされるのではないことを教え、安心させようとしておられるイエス様の言葉を読みました。それが、「14:3 **あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。**」というものです。イエス様が天におられる父なる神のもとに行かれてから、そこに弟子たちのために備えをされたら、また戻ってこられるのです。私たちは、主が教会のために戻ってこられることを切望して、恋い慕って、それで今の自分を生きることができますね。

しかし、主がまだ戻ってこられない間、私たちを慰めてくださる、もうひとりの助け主が来られるという約束が、ここ 14 章後半に書かれています。神の御霊の約束です。私は個人的に、その約束がとてもわくわくします。今日の教会で、軽視されている方ではないか？と思います。父なる神と主イエス・キリストを信じたならば、その他のことは、あたかも私たちの力と知恵によって運んでいくのだ、といわんばかりの雰囲気があります。私たちは、天におられる主から離れている間、この方が戻ってこられることを強烈に待ち望みながら、今は、聖霊に満たされて、聖霊に動かされて生きるのです。私たちの力や知恵ではなく、聖霊が運んでいってくださいます。

1A 戒めを守る愛 15-24

1B 真理の御霊 15-21

15 もしわたしを愛しているなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。

イエス様は、13 章から、ここの最後の晩餐の場から「愛する」ということを強調されました。「彼らを最後まで愛された(1 節)」とあります。愛するということが、仕えるということとつながっていることを、イエス様が弟子たちの足を洗われたところから見ることができましたね。愛することは、気持ちのことでなく、真実な行いであることを知りました。イエス様を愛するということは、この方を主としているのですから、この方の命令を守ることに他なりません。今日、感情が全てにまさって大事であるとされる時代に私たちは生きています。感情を害するならそれは、愛ではない、というような

定義です。しかし、聖書の時代、愛とは真実な行いであり、忠誠でありました。どんなことがあっても、犠牲を払ってでも、私はこの方の言われることに従いますというものが、愛でありました。

旧約聖書において、主を愛することと、戒めを守ることは一対にされていました。「申 7:9 あなたは、あなたの神、【主】だけが神であることをよく知らなければならない。主は信頼すべき神であり、ご自分を愛し、ご自分の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られる。」主なる神について、「6:5 心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」というのは、主の命じられることに心を留めることに他なりませんでした。

ところが、歴史は、イスラエルの民がことごとく主の戒めを破っていったことを伝えて行っています。ついに、主は彼らを敵の手に渡されました。北イスラエルはアッシリアに、南ユダはバビロンに引き渡されました。バビロンに引き渡される前に、主はエレミヤに、新しい契約の約束を与えられました。「31:33 わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。」石の板ではなく、心に書き記すと言われたのです。それが可能になるのは、御霊が注がれて心が新たにされることであります。エゼキエルが、そのことを預言しました。「36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」御霊を主が与えられることによって、私たちの心が一新され、それで主の掟に従って歩むことができるようになる、という約束なのです。そしてイエス様は、次、16 節から、この御霊の約束を与えられるのです。

16 そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。

イエス様は、父のもとに戻られます。天に昇られます。その時に、父にお願いします。そして、「もう一人の助け主をお与えくださり」とのことです。弟子たちが、イエス様なしにこの地上で生きなければならぬ時、つまり、今の私たちでもあります、主がまだ、天におられる父なる神の右の座におられて、地上には私たちしかいません。けれども、もう一人の助け主である御霊を下さっているのです。ここの「助け主」のギリシア語は、パレクレトスと言います。パラというのが、「そばに」という意味で、クレトスは、励ますとか、慰めるという意味の言葉から来ています。「そばに来て、助けるよう呼ばれた」という意味です。

イエス様がおられた時に、イエス様は彼らにとって助け主でした。共におられることによって、どれだけのことが助けられたでしょうか？彼らは酷く非難されました。自分たちのしていることが、律法に違反するとパリサイ人から非難されました。例えば、安息日に麦の穂をとって、食べたことです。けれども、イエス様がダビデの話を持ち出して、ダビデもひもじかった時に祭司のパンを食べ

たのだと擁護されました。舟に乗っている時、嵐が起きました。イエス様が叱りつけると、嵐は凧になりました。ペテロの家に、宮の納入金のために税を取り立てにきた者がいました。納税するお金がありません。それでイエス様は、ペテロの得意な釣りをしなさい、と言われました。なんとその釣った魚の口に、硬貨があるというのです。そして、ペテロは姑の熱をイエス様に癒していただきました。主が共におられることによって、彼らはどれだけの助けになったことでしょうか。

そこで主は、「もう一人の助け主」を父がお与えくださると言われるのです。ギリシア語には「もう一人」あるいは、「もう一つ」を言い表すのに二つの言葉があります。アロスとヘテロスです。「アロス」は、「同じ種類の別のもの」という意味です。例えば、トヨタの車と日産の車とか。同じ車ですが、製造会社が違いますね。この時はアロスです。けれどもヘテロスは、「異なる種類の別のもの」という意味で、車と自転車、という感じです。性質と種類が違います。ここでイエス様が使っているギリシア語は、アロスです。つまり、同じ種類の助け主です。イエス様と同じ性質ということです。聖霊が遣わされたら、イエス様がおられるのと同じように、あなたがたの助け主になるよ、ということなのです。ですから、私たちは、イエス様と顔と顔を合わせてみることを、切望しているのですが、まだその時が来る前も、もう一人の助け主がおられることによって深い慰めを受けるのです。

そして、この方が「その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます」ということです。主が戻ってこられるまで、いつまでもいてくださいます。イエス様が大宣教命令で、こう語られましたね、「マタ 28:20 見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」主が、もう一人の助け主である御霊によって、私たちと世の終わりまで共におられるのです。

17 この方は真理の御霊です。世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません。あなたがたは、この方を知っています。この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。

イエス様はこれまで、ご自身は真理を語り、真理を証していると言われ、弟子たちには先に、「14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と言われていました。ヨハネは、福音書の冒頭で、「1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」と言っていました。そしてイエス様は、後で、聖霊がご自分のことばを教え、思い起こさせ(26 節)、御父に対して、「あなたのみことばは真理です。」と言われます(17:17)。聖霊は、真理であるイエス様を証しされ、また真理である、神のことばを教えてください。

そこで主は、「世はこの方を見ることも知ることもないので、受け入れることができません」と言われます。聖霊のお働きによってこそ、キリストにある神の愛を知ることができます。「ローマ 5:5 私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちに注がれているからです。」罪人のために死なれるキリストにある神の愛は聖霊が注がれているものであり、聖霊がなければ世はこれを見るこ

とも知ることもできず、受け入れられないのです。そして、神のみことば全般も、御霊によらなければ、知ることも、理解することもできません。「I コリ 2:13-14 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」

しかし、ここでイエス様は弟子たちを励まされていますね、「あなたがたは、この方を知っています。」みなさんは、しばしばお感じになっているのではないのでしょうか？「私はまだ、聖書のことを分かっていない。」でも、イエス様は真っ向からそれを否定しておられます。「あなたがたは、この方を知っています。」なのです。真理の御霊を弟子たちは既に知っていると言断言しておられるのです。イエス様は、弟子たちにご自身をすでに知っているから、どこに行くかの道も知っていると言われていました。神の恵みによって、聖霊によってみなさんはすでに知っています！むしろ、自分には知識が与えられているとして、あなたがたはまだ知らないのだと教えてくる異端に対して、激しく警戒してください。そういう人たちは、みなさんを奴隷にしていきます。「I ヨハ 2:20-21 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。」

そして、主はさらに大胆なことを語られます。「この方はあなたがたとともにおられ、また、あなたがたのうちにおられるようになるのです。」共におられるだけでなく、内におられるようになるということです。これが、新しい契約における御霊の大きな働きであり、共に住んでくださるだけでなく、内に住んでくださるのです。聖霊は、まだ神を知らない人にも来られて働きかけ下さいます。罪について過ちを示し、キリストの十字架が救いに必要であることを教え、悔い改めに導いて下さいます。しかし、悔い改めて、キリストを信じた時には、御霊は私たちが新しく生まれさせ、神の子供としてくださるのです。御霊が内に住まわれることによって、キリストが内に住まわれて、父なる神も住んでくださるといふ、すごいことが起こるのです。パウロは、「コロ 1:27 この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」ですから、私たちは神殿という建物に入らずとも、私たちが集まる場所で、そのまま主が共におられて、集まって祈るところが神殿になるのです。「I コリ 3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」

18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。19 あと少して、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。

主が弟子たちに語られている一番大きな動機は、「あなたがたを捨てて孤児にはしません」ということです。ご自身が父の下に行くといっても、親に捨てられた孤児のようにはしないということです。だから父の住まいで場所を用意したら、また戻ってくると言われました。もう一人の助け主を父が与えてくださると言われました。

そして、ここで「あなたがたのところに戻って来ます。」と言われているのは、復活のことです。主が死なれても、三日目によみがえり、弟子たちに現れるということであります。三日目に弟子たちの間に現れましたが、トマスがそこにいませんでした。けれども八日目に再び現れました。弟子たちはエルサレムから、主が命じられたようにガリラヤに行った時、舟にいて漁をしてもとれない時に、主が岸辺から呼ばれました。他にもいろいろところで現れ、使徒 1 章によると四十日間現れてくださいました。しかし、世は見なくなります。主がよみがえられた時に、天使が来ましたが、ローマの番兵は震えあがって、死人のようになってしまいました。他の者たちは見ていません。だから、弟子たちが盗んだのだとする祭司長たちが流した噂は、すぐに広がっていったのです。

そして、「わたしが生き、あなたがたも生きることになるからです。」と言われます。主が死者の中からよみがえり、生きているから、あなたがたも死んでも生きることになるのだ、ということです。イエス様がマルタに言われました。「11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」そして、将来の復活だけでなく、今を、イエス様が生きておられるから生きているのですと告白することができますね。「ガラ 2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」

20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。

「その日」とは、よみがえられた日だけでなく、聖霊が弟子たちに与えられた日も含みます。主のよみがえりによって、確かにイエス様が父の内におられる、つまりこの方と父が一つであることが分かります。そして聖霊によって、今度は、イエス様が自分たちのうちに、そして自分たちのうちにイエス様がおられることが分かるようになります。

21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」

先の話にイエス様は戻っておられますね、戒めを保ち、守る人がイエス様を愛しています。そしてその愛の関係の中で、父の愛を知ることができます。今、ここでイエス様が考えておられるのは、シナイ山です。戒めを守るというイスラエルの民の宣言によって、主がご自身を現わされました。

今、イエス様は、「父なる神がわたしによって現れるのだよ」ということを示しています。そして、イエス様は、愛の関係を強調しておられます。愛の関係の中で、イエス様がその人に現れてくださいます。神は心を開かない人に、ご自分を現わしません。無理やり、口をこじ開けて食べ物を食べさせるのが愛ではないように、ご自身に心を開き、この方の言われることに聞き従うことのない人に、ご自身を現わすことはないのです。

2B 共に住まわれる方 22-24

22 イスカリオテでないほうのユダがイエスに言った。「主よ。私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」

先にペテロが質問をし、次にトマスが、そしてピリポが質問をしました。イエス様がしばらく語られていた中で、さらにイスカリオテではないユダが尋ねました。マタイやマルコの福音書では、彼の名が出てこないのですが、おそらく「タダイ(マルコ 3:18)」と思われます。彼は、先ほどからイエス様が、世は知ることはない、見ることはないと言われていたので、どうしてそうされるのですか？という素朴な疑問を投げかけています。

23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。
24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。」

御霊が内に住まわれて、主が住まわれ、主が住まわれるということは父も住まわれます。なんとなくすごい慰めでしょうか！

そして、何度となく、イエス様は、ご自身を愛していることと、戒めを守ることを一つにして語っておられます。口では主よ、と言っている、戒めを度外視しているのであれば、その人は愛してない、つまり、この方を知らないということです。イエス様は、このことによって、実によって実を見分けることができると言われました。「マタ 7:21 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」先週の平日礼拝にて、偽預言者とそうでない者の違いをイエス様は語っておられました。律法主義に陥っていたパリサイ人たちは、律法を行っていたようで、キリストにつながっていないので化けの皮が剥がれる、つまり、実際は神を知らなかったという、行いが現れます。それによって見分けることができるのだ、とイエス様は言われました。行っているようでも、愛していなければ守ることはできません。また逆に、愛しているといっても、真実な行いがなければ、口先だけでしかありません。

2A 思い起こさせる方 25-31

これで、イエス様は弟子たちにお語りになりたいことを、とりあえず語り終えました。

25 これらのことを、わたしはあなたがたと一緒にいる間に話しました。26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

イエス様は、これらのことを語っても、今の弟子たちにはすべてを理解することはできないことを、知っておられました。弟子たちは、イエス様を知っていましたが、それでもその語られる意味を知ることとは別です。しかし、聖霊によってそのことが可能になります。

イエス様は、ご自身を愛する者は、ご自身の戒めを守ると言われましたが、その戒めを教え、思い起こさせる働きは、聖霊によって与えられるのです。助け主の大きな働きの一つです。助け主は、イエスの御名によって遣わされます。ですから、イエスを主とすることを教え、この方が語られることを教え、また思い起こさせてくださるのです。イエス様がなされていることが、一体どういう意味なのか、弟子たちが後でわかったということ、ヨハネは何度か書いています。例えば、エルサレムにろばの子によって入られたことが、ゼカリヤの預言の成就だということ、「12:16 イエスが栄光を受けられた後、これがイエスについて書かれていたことで、それを人々がイエスに行ったのだと、彼らは思い起こした。」とあります。ですから、使徒の働きを読めば、また使徒たちの手紙を読めば、そこには律法学者のような公式の教育を受けていない弟子たちが、見事にユダヤ人たちに、聖書からイエスがメシアであることを論じることができたのです。

ですから、聖霊に満たされることを強調しすぎることはないのです！主の戒めは、聖霊によって、主との愛の関係の中に入っていなければ、守ることはできません。そして、その戒めが何であるかを知ることも、また聞いたことを思い起こすのも、聖霊の働きによるのです。みなさんの中で、ある時に、これまで覚えたことがあるかな？と思うほどの御言葉が、適切な時に出てきた、ということはないでしょうか？また、語っているうちに、主が与えてくださる御言葉が出てきたということはないでしょうか？自分の知らないうちに、御言葉が与えられるのです。

27 わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。

イエス様が、何度となく弟子たちにこれから語られる言葉は、「平安」です。ユダヤ人は、シャロームという言葉を使っています。当時の世界、ローマは、パクス・ロマーナと呼ばれ、武力によって平和がもたらされていました。皇帝の力によって与えられていた平和です。しかし、主がお生まれになった時、天から来た使いたちが歌ったのは、「ルカ 2:14 いと高き所で、栄光が神にあるよ

うに。地の上で、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」でありました。そしてこれは、預言者イザヤが、男の子が生まれたら、彼は「平和の君」(9:6)と呼ばれると言った通りでした。

日本語には、「平和」と「平安」の二つがありますね。これは、分けるのにとっても良い言葉です。聖書では、「神との平和」があります。「ローマ 5:1 私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」これは、罪をもって神に反抗していて、敵対関係にあった私が、キリストにあってその敵意をご自分に置かれることによって、和解してくださったことを意味します。神はもはや、敵対しておられない、ということです。けれども、平安は神のものであって、神に満たされることによって、心と思いに与えられるものです。「ピリ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」平安は、神が支配しておられるということからくる安心です。神が主権者であり、すべてを動かしているのは神である、ということです。イエス様は、この暗闇の力が働いている時でも、ご自分ですべてを掌握されていました。なので、平安なのです。

28 『わたしは去って行くが、あなたがたのところに戻って来る』とわたしが言ったのを、あなたがたは聞きました。わたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くことを、あなたがたは喜ぶはずで
す。父はわたしよりも偉大な方だからです。

弟子たちが、ご自分が離れるのを悲しんでいましたが、イエス様は、父のもとに行くのだから、私を愛してくれるのであれば、喜んでくれるよね？ということです。父と子の関係、父が偉大であり、子はその元に戻ります。そこに行くことを考えれば、喜べるはずで
す。

29 今わたしは、それが起こる前にあなたがたに話しました。それが起こったとき、あなたがたが信じるためです。

主は、予め語られることによって、ご自身が確かに神からの方であることを知るようになります。イザヤ書にも数多く、主なる神は、初めに語られたことが後にそうなることによって、わたし以外に神はいないということを、何度となく言われました。

30 わたしはもう、あなたがたに多くを話しません。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることができません。31 それは、わたしが父を愛していて、父が命じられたとおりに行っていることを、世が知るためです。立ちなさい。さあ、ここから行くのです。

イエス様を捕えに来るものが動き始めています。それをイエス様は、「この世を支配する者が来る」と言われています。彼らの背後で動いている真の勢力がこれだからです。しかし、悪魔はご自

身に対して何も手を出すことはできません。この死をも、神は全世界の罪を取り除くための供え物としてくださるからです。そして、この十字架が神によって見捨てられたのではなく、かえって父に子が従順であり、世を愛するために子を与えられたことを証するものだと、後で分かるようになるということです。

そして、「さあ、ここから行くのです」と言われました。今、二階の大広間で最後の晩餐にあずかっていましたが、そこからオリーブ山のほうに向かわれます。そこにあるゲッセマネの園に向かいます。15章には、園に向かう途中での会話をもヨハネが記録しています。

こうやってイエス様は、ありったけの言葉を持って弟子たちを励ましました。そばにいて、励ましたのです。この働きこそ、パラクレトスなのですが、今はもう一人の助け主、聖霊が私たちに働いておられるのです。どうか、イエスを愛し、その戒めを守る喜びの中に入ってください、その中では、みなさんがイエス様に愛され、神に愛され、内に住まわれるという不思議な体験をするのです。そして、イエス様が現れてくださるという体験もします。聖霊がおられるからです。